

第4章 政権を目指す闘い

難しかった新民主党の運営

——「自自公連立政権」の正式な発足は99年の秋ですが、それに先立つ通常国会では実質的に「自自公」の枠組みが働いて、周辺事態法、通信傍受法、国旗・国歌法、住民基本台帳法などの重要な法律が次々と成立していきました。前年の参院選で民主党は勝ったものの、その結果、自民党が連立を組み直して多数派を形成し、その力で法案がほとんど通っていったわけです。このころ菅さんは代表でしたが国会運営はかなりしんどかったんじゃないですか。

菅 98年の参院選直後の金融国会までの出来事は、私の中で印象が強く残っているんです。



衆院予算委員会で、自衛隊の活動についてパネルを手に質問（1999年1月）

その後、私自身のスキャンダルもあつたりして、積極的な動きができませんでした。99年1月には民主党としての初めての投票による代表選があり、松沢成文君を破って私が再選されましたが、求心力はあまり高まりませんでした。ですからいま言われたいろいろな重要な法案について、あのとき何がどう進んだかという鮮明な記憶がありません。

98年に大きい民主党ができたとき、私が代表で羽田孜さんが幹事長、鳩山由紀夫さんが幹事長代理というシフトとなった。ここは表現が難しいんですが、元総理が幹事長だと難しいんです。代表の私が幹事長の羽田さんに「こうしてください」とはなかなか言えない関係になるわけですね。ですから私がときどき羽田幹事長にご相談にうかがうという感じでした。そして、幹事長代理の鳩山さんが実質的な幹事長役をやっていたんですが、政党の運営上はなかなかピリツとしないわけです。

——鳩山さんはそのころ雑誌の「文藝春秋」で、「全員野球ではなく菅さんの連投になった結果、観客も飽きた。菅さんは冷たい印象を与えている。議論で勝っても印象で負けている。民主党は菅さんにおんぶに抱っこではいけない」と、かなり辛辣な言い方をしています。政党が大きくなったためうまく全体をコントロールできない状況にあったわけですか。

菅 そもそも政党のマネジメントは難しいものですが、今になって思うと民主党が98年に大きくなったとき、どう運営するかというイメージが私の中では必ずしも明確ではなかったのです。合同するところまではかなり一生懸命やったが、そのあとのマネジメントについてもっとしっかりとしたイメージがあれば、もう少しいろんな手が打てたように思います。しかし、どちらかというと「全体の中で仲よくやっていこう」みたいに考えていたから、何となく求心力が薄れていったという感じがします。98年の参院選であれだけ勝ったんだから、もっと強気にやってもよかったです。

——そうした党内の空気がいちばんはつきりと現れたのが衆院での国旗・国歌法の採決です。民主党は「日の丸」法制化だけを認める法案を提出し、否決されたあとは自主投票でした。その結果、政府提案の国旗・国歌法について民主党は賛成が45、反対が46と真つ二つに割れました。しかも菅さんは反対し鳩山さんは賛成と幹部も割れました。このことについて菅さんは「世論調査の結果と同じだ。民主党が世論を反映した健全な政党だということを示している」とコメントしています。

菅 この問題は若干経緯があります。わが党は対案を出したが、それは国旗については認

(1)「国旗は、日章旗とする」「国歌は、君が代とする」というわずか2条からなる法律。99年8月に施行された。同年3月、広島県の立高校長が卒業式での日の丸掲揚や君が代斉唱を巡って、県教委と教職員組合との板ばさみになって自殺したことがきっかけで当時の野中広務官房長官が法制化を進めた。

めるが国歌は見直そうというものでした。簡単に言うとな国旗は歴史的にもデザイン的にも非常に親しまれている。しかし、国歌は何となく元気が出ないし好き嫌いもある。だから見直すことを党議で決めた。そして最終的にわが党の案が否決されたときに、国旗・国歌法については自主投票にした。それでああいう数字になった。もし自主投票でなく賛成か反対のどちらかに決めていけば、若干造反が出たかもしれないが真つ二つになることはなかったと思います。今になって考えればあまりいい戦術ではなかったかもしれないですね。党として賛成なり反対なりを決めて投票すればよかったです。

——自主投票にするしないについては、相当議論があったんですか。

菅 もちろんです。重要法案について自主投票にすることはほとんどないですからね。党内の意見が割れてかなり厳しいものでも決めるときは決めてきた。ただ特に国歌についてはメロデーとか歌詞についていろいろな議論があった。この問題は個人個人の歴史観的なものもあるから自主投票にしようという意見もあった。つまり政策的議論じゃなかったんです。

——菅さんは当時の国会にあまり深くかかわっていなかったのですか。ということは党のほうの運営に神経を使っていたということですか。

菅 国会のマネジメントというのは独特で、党の代表が必ずしも直接かかわるわけではありません。代表は政党全体のイメージなんです。もちろん国会のマネジメントは重要ですが、民主党がどういう法案を提出するかとか、政府提案の個々の法案にどう対応するか、国会審議の進め方についてどこまで突っ張るかという話に全部かかわっていたら体がもたない。そのために国会対策委員会があり、幹事長や幹事長代理がいる。そして、通常は幹事長が中心になって采配するのです。

もうちょっと踏み込んで言えば、98年に「新民主党」ができたときの党役員人事は私が決めたわけではないのです。このときは4つぐらいのグループが合併したわけですから、代表になりましたけど、私だけですべての人事は決められなかった。あらかじめ細川護熙元首相が努力して各グループに納得してもらった人事ですから、実務的に動きやすいという意味での人事にはなっていないわけです。

——それで羽田さんが幹事長になったわけですね。

菅 一生懸命動いた細川さんは「自分は一切、役職につかない」と言われた。政治歴など

(2) 代表が民主党の菅直人代表、幹事長が民政党の羽田孜代表、政調会長が新党友愛の伊藤英成幹事長、総務会長に民主党の横路孝弘副代表、幹事長代理に民主党の鳩山由紀夫幹事長、国会対策委員長に民政党の石井一副代表などという人事となった。新民主党の人事は、合流した民主党、民政党、新党友愛など各党間の調整が難航し、最後はバランスを配慮した人事となった。

を考えれば羽田先生が代表になるというのがあるべき姿だったかもしれないが、旧民主党がいちばん大きなグループだったこともあって私が代表になり、鳩山さんが幹事長代理になった。だから私は代表として形の上では幹事長や幹事長代理ら幹部を任命しましたが、私からああしてくれ、こうしてくれという関係ではなく、フワツとした集団指導体制だった。だから私が直接、国会運営に関して根回しなどをした記憶はないのです。

——国会運営や党運営に関しては、だれに実権があるんですか。

菅 それは完全にそのときどきの人によります。小沢一郎さんが代表になってからはよくも悪くも小沢さんが代表として大きな存在である。ただ、小沢さんは周りを自分に近い人間だけで固めるということはしないで、鳩山さんや私とのトロイカ体制でやった。だからわりと安定している。前原誠司君が代表だったときは、幹事長が鳩山さんだったが、幹事長代理や政調会長、国会対策委員長というポストは自分と同世代の人間で固めた。ほかの人たちは「どうするか様子を見ていよう」という姿勢だった。その結果、「偽メール問題」という大失敗をしてしまった。

前原君の前の岡田克也君は、05年の総選挙の大敗の責任をとって辞めましたが、彼は幹部に中堅どころの議員を配置した。しかし、小泉流の特殊な選挙はスピード感が全然違うんですね。向こうは時速200キロで走る。こっちは今から釜を焚いてシユツシユツポツ

ポと動き出そうみたいなスピード感でしたからね。(笑い)

出るつもりはなかった代表選

——菅さんは99年9月の代表選に出て、そこで勝って改めて自分の体制をつくらうとは考えたのですか。

菅 いえ、代表選には出ないでいっぺん引こうと思っていました。96年に旧民主党をつくってから、鳩山さんと2人で代表や幹事長をやってきたが、この時期自身はマスコミでたたかれたりいろんなことがあったので、ここは引こうと思っていた。それで、私と鳩山さんの両方と親しい仙谷由人さんに「もう、代表を引きたいから鳩山さんにそれを伝えて、

(3) 05年9月に民主党代表となった前原誠司氏は幹事長に鳩山由紀夫氏を起用。そして、国会対策委員長に野田佳彦氏、政調会長に松本剛明氏と同世代の議員を起用し、「次の内閣」の顔ぶれを含め旧社民党系と旧民社党系の議員が少なかったため党内から不満が出た。

(4) 06年2月、衆院予算委員会で民主党の永田寿康議員が「ライブドアの堀江貴文氏が、05年8月26日付の社内メールで武部勤自民党幹事長の次男にコンサルタント費用として3000万円の振り込みを指示したメールがある」と指摘した。その後、このメールは偽物とわかり永田氏は議員を辞職、民主党代表だった前原氏も代表を辞任した。

(5) 04年5月に民主党代表に就任した岡田克也氏は、幹事長に旧自由党幹事長の藤井裕久氏、政調会長に仙谷由人氏、国会対策委員長に川端達夫氏らベテラン議員を起用した。

鳩山さんが出るようにしてほしい」と話した。それがどう伝わったのかわかりませんが、鳩山さんは「出ない、出ない」と言い続け、ギリギリになってだれも出ない。半ばしかたなく私が「それじゃあ出ます」と言ったら、それを待っていたかのように鳩山さんが「やっぱり出る」と言って、結局選挙になった。私にとっては態勢も整わず厳しい代表選挙でした。

——なぜ、そういう経過になったのですか。仙谷さんは、菅さんと鳩山さんのいずれのほうが代表にいいと思っただけですか。

菅 仙谷さんは90年に社会党から初当選し、93年に惜しくも落選した。96年に民主党から出て、私も全力で応援し、当選するとすぐに政調会長をやってもらった。仙谷さんと鳩山さんと私は同世代。仙谷さんはリーダーになる可能性を持った人だけに同世代間の一種の見えないライバル意識もあったかもしれないね。

——この代表選に絡んで菅さんは、元日本弁護士会会長の中坊公平さんに接触して「民主党の首相候補」として次期総選挙に立候補するよう働きかけたという記事があります。

菅 99年の代表選に私が出ない場合、いちばんオーソドックスなのは鳩山さんにやってもらうことだったが、そこがなかなかはつきりしない。当時、中坊さんは社会的に非常に存在感のある人でしたから、お会いして「党首をやりませんか」ともちかけたことがあります。

菅 そのとき中坊さんは「自分は司法改革をやりたい」とおっしゃるので私は「最高裁判事は誰が任命するんですか？ 総理大臣じゃないですか。総理大臣になってしまえば司法改革ができるじゃないですか。民主党の党首をやって政権をとれば、司法改革ができるじゃないですか」と口説いた（笑い）。いいところまでいったかと思っただけですけど、了解はしていただけなかった。

——脈があったということですか。

菅 いや、脈があるというところまではいかなかったですね。

——この代表選は、第1回投票で鳩山さんが154、菅さんが109、横路さんが57でした。そして、決選投票で鳩山さんが182、菅さんが130でした。

菅 決選投票で横路さんのグループの票がかなり鳩山さんに行っただけということですね。

(6) 菅氏は99年7月、東京都内のパーティーで「民主党の代表選は首相を選ぶ前の準決勝のようなものだ。代表選は私になるのが前提だとおもしろくない。中坊公平さんや高知県知事の橋本大二郎さんもおもしろいし、鳩山由紀夫さんもいつか首相になる人だと思ってる」と発言した。菅氏の打診に対して中坊氏は「百パーセント無理な話だ」と断ったという。

組織政党か議員政党か

菅さんは市民組織からスタートした政治家ですが、市民派は組織的な動きが苦手な人ですか。

菅 市民派は自分たちが好きなことはやるけれども嫌いなことはやらないですからね（笑い）。私は薬害エイズや土地問題などに取り組んできたテーマ型政治家ですね。テーマで共鳴する人はたくさんいると思うが、代表選で投票してもらおうというときには黨員になってもらわなきゃならない。あるいはサポーターになってもらわなきゃならない。じゃあ年間2千円の会費を納めるサポーターを千人、1万人つくれるかというと、それは駅前で演説しているだけではつくれない。やはり労働組合か何かの力がないとできないのです。

社会党がダメになったのは、当初、黨員の中から選ばれる代議員で党首を決めていたためです。このやり方は一見民主的だが実は非民主的だ。なぜかという社会黨員の分布と、国政選挙で社会党を支持している1千万人の投票者の分布にもすごい隔りがあるからです。

党内の活動家と言われる人たちは左派が多かった。そしてこの活動家が全国で代議員を選ぶ。初期のころは、国会議員でも代議員になれなかった。例えば岡山県出身で党内右派

の江田三郎さんが活躍していた時代、「岡山県本部から代議員は何人」と指定されると、毎日ピラを配って活動している左派の社会主義協会の人たちが選ばれる。左派は国会議員集団としてはほんの少数しかいなくても足元の活動家が多い。国民レベルになると、社会党支持者の中でも協会みたいな古い社会主義の人たちはほとんどいない。ところが代議員はそういう人たちが占める。そのギャップが社会党の悲劇で、江田三郎さんや田英夫さんが飛び出すきっかけにもなった。

私は逆説的にそれを見ていましたから、ある時期から組織政党論とか党内民主主義論はやめた。議員中心のほうがより民主的だと考えるようになったのです。というのも議員は選挙に当選しなければならぬから、党内だけじゃなく駅前のたばこ屋のおばちゃんは何を考えているか、床屋のおじさんが何を考えているかを知っている。だから党の代表を国会議員で選ぶことは決して非民主的ではないというのが私の持論だ。

——民主党もそういう構造ですか。

菅 社会党の歴史をずっと見ると党内民主主義で失敗したんですね。議員民主主義のほうがよくて世論が正確にストレートに入ってくるんです。政党というのはやっかいなものです。

——底辺の黨員から直接支持を集めるような制度改革はあり得なかったのですか。

菅 もちろんいろいろ試行錯誤しました。それを最高に成功させたのが、もしかしたら小泉さんかもしれません。小泉さんが最初に自民党総裁に当選した01年の総裁選は、国民大衆の人気を得ることで、農協や郵政などの伝統的な支持団体を溶かしてしまった。そういう意味ではすさまじいことをやった。

——社会党はそれができなかったわけですね。

菅 民主党になって社会党的な党内民主主義はなくなり、国会議員中心の政党になった。よく議員政党か組織政党かということを議論していました。私は初めから「議員政党で行くべきだ」と主張していた。組織政党というのは社会党で失敗している。共産党も基本的な組織原理は政治局中心の組織政党です。それに比べると民主党は両面あって大変だが、あんまり党官僚は強くない。議員が全部自分でやりますからね。

——菅さんの理念はわかりますが、01年に田中甲代議員が「労組依存体質の民主党ではやっていられない」と言って離党したように、民主党の現実の問題がないわけではなさそうですね。

菅 私のイメージからいったら民主党は明らかに社会党とは違う。社会党は総評の力が圧倒的に大きかった。社会党は戦争直後にできた当初はそうでもなかったが、しばらくするとお金も人も労組に依存しなければやっていけない政党になった。だから国労や全電通な

ど大きな労組は特別な扱いをされて、社会党の代議員の枠を持っていた。つまり労働組合が支持団体ではなく政党の構成要素になっていたわけです。

一方、民主党は労働組合の影響が大きいか小さいかというのは、あくまで影響であって、政党の組織原理そのものに外の団体が入り込んでいることはないです。

——民主党の国会議員は安易に組合に乗っかるのではなくて、自分で支持基盤とか後援会をつくっているんですか。

菅 民主党がスタートして10年あまり、支持基盤のつくり方は人によって違います。極端な例で言えば小沢一郎さんは地元に大王国を築いています。選挙区の頑強な後援会を超えて、あるいは岩手県を超えて東北全体や全国的に後援会を持っている。私は独特なやり方で個人の後援会、支持グループをネットワークで持っている。一方で労働組合のウエートがかなり高い人もいる。私も選挙になれば労働組合が応援してくれますけど、私の場合は主体的につくった後援会を中心にし、それに労働組合が応援してくれるという形ですね。

(7) (1957) 立大卒。千葉県市川市議会議員、千葉県議などを経て、93年に新党さきがけ公認で衆院選初当選。以後、当選3回。01年4月、連合の組織内候補擁立の原則廃止を求めるなど民主党の労組依存体質を批判して離党を表明し除籍となった。同年6月、新党「尊命(たける)」を結党したが03年の総選挙で落選した。

しかし、議員によっては労働組合が中心の人もいます。

——社会党に比べて組合依存度が低くなってきたというような変化はあるのですか。

菅 依存度が低い議員の中にも2種類ある。若手や中堅の中には後援会などをしっかり自前でつくっている議員がある程度います。一方、選挙で危ないのは駅前でマイクを握って演説しているだけの議員です。こういう人が結構多いのです。

——松下政経塾出身の人はどうなですか。

菅 松下政経塾出身者にもいろんなタイプがいます。地方議員を経験しているかどうかということもある。前原誠司君なんかはすごい後援会をつくっている。婦人部隊なんていうのは強いです。逆に2回も当選したのに駅前でマイク持って通っているだけだから世の中の風の向きがふつと変わって落選した人もいる。労働組合か自前の組織かというだけじゃなくて両方ともない人もいます。

偽メール事件で議員を辞めた永田寿康君なんかも、国会活動と駅前とピラというタイプで、個人後援会をつくらない人だった。

政調会長時代

——99年の代表選は鳩山さんが勝って、10月から新しい体制が始まり菅さんは政調会長に

なりました。当時の新聞記事を見ると菅さんは「代表だったときと違って、肩から力が抜けて生き生きとしている」と書かれています。年金制度改革の法案について国会で厳しい質問をするなど、それまでの菅さんとは明らかに変化がありました。

菅 今、私は代表代行ですごく仕事がやりやすい。同じように政調会長もやりやすかった。私は代表がいちばん苦手であんまり好きじゃない。代表のころは朝6時にパツと目が覚めてどうしても新聞を見たくなる。見ると民主党のことが必ずどこかに書いてある。記事の8割は悪口でそれも全部自分のことだと思ってしまう。代表やっているときは肩がこって2日に1回ぐらいマッサージした。代表でなくなったとたんに、朝6時に目が覚めても「まだ6時か。もう1回寝よう」となるんです(笑)。肩こりもまったくなくなった。代表というのは本当に党の代表なんです。そう感じるんです。自分はタフだと思っていただけど、ものすごくプレッシャーを感じるんですね。よほど確信を持って走らないと務まらないポストです。

(8) 政財界の指導者を育成するために松下幸之助氏が私財を投じてつくった私塾。全寮制で修業年限は原則2年。卒業生の半数は国会議員や地方議会議員など政界で活躍している。

(9) (1969) 東大卒。大蔵省に入り、00年に民主党公認で衆院選初当選。以後、当選3回。06年、「偽メール事件」で議員を辞職した。

それが政調会長になってみると、何をやらなきゃいけないかということが十分にわかっている。自分の行動に自由度がある。代表のほうが自由なように見えるけれど、実はあまり自由じゃあないんだ。

代表になると、内と外で党をきちんと動かせるかどうかが重要なんです。外に向かって党を代表すると同時に、その立場を内側でしっかり支えて国会や地域で動いてくれるかどうか。それがけっこう大変なんです。ちよつとしたことでも内側から批判されると中途半端に反論もできないから代表というのはしんどい。それに比べるとナンバー2は「そういう意見もあるよな」で終わりだから、楽でいい。

政調会長になって一皮むけたというのではなくて、もともとそっちのほうが得意なんです。社民連時代もずっと政調会長だった。政策という自分のフィールドに戻ってきたようなものなんです。

——鳩山代表時代に、政治主導の名のもとで政府委員制度を廃止し、党首討論¹¹を導入しました。同じころ民主党は対案重視の責任野党路線から、対決型の政権批判路線に移ってしまいました。対案型か対決型かというのは、野党にとつてけっこうしんどい選択だと思えます。どのように取り組まれたんですか。

菅 私は対案型と対決型にそんなに差があるとは思ってない。選挙は有権者が何をもって選ぶかということが重要だ。対案型だと民主党が言っていることがいいか自民党が言っていることがいいかという選択になるはずですが、実際はそうではない。選挙は何と言ってもし第1に政権に対する評価ですね。政権がやっていることを有権者が納得すれば政権側が勝つ。おかしいと思ったら野党に投票する。つまり野党が言っていることがいいから政権が来るんじゃないかと、政権の側がやっていることがおかしいときに政権が来るわけです。逆に言うと政権側がおかしいときに有権者が投じてくれるだけの信頼感を持たれる政党であればいいわけです。政府なり与党がやっていることがどうもおかしいと思ったときに、それならこつちにやらせてみようというベクトルが働くような政党でなければならぬ。だから対案路線か対決路線かということは私はあまり考えない。野党は政権側の主張に応じて対案を出せばいい。対案を出すことによって相手の失敗をより強く国民が理解してく

(10) 国会審議で閣僚に代わって中央省庁の官僚が答弁する制度で、明治時代から続いていた。政府委員制度廃止は小沢一郎氏の持論で、国会審議を官僚主導から政治主導にすることが目的だった。99年1月、自民党と自由党の連立合意で廃止が決まった。しかし、以後も「政府参考人」という形で官僚答弁が実質的に続いている。

(11) 衆参合同で設置された国家基本政策委員会が首相と野党党首の間で行われる論戦。国会開会中は毎週1回、行われることが原則だが、ほとんど開かれていない。英国議会のクエスチョン・タイムがモデルで、国会審議の活性化を目的に99年に導入された。

ればいいわけですからね。

国会は討論の場

——99年10月の臨時国会から導入された政府委員の廃止や11月に初めて実施された党首討論はどう評価しましたか。

菅 これはわれわれがいちばん最初に主張していたことです。私の書いた『大臣』（岩波新書）という本には、政府委員の廃止のほかに事務次官会議の廃止も書いています。

——党首討論も登場する人によりますね。鳩山さんの党首討論は非常に紳士的で穏やかでしたから、党内でフラストレーションがたまったようですね。

菅 党首討論というのは英国がモデルです。私が英国の党首討論を初めて見たのは96年でした。保守党のメージャーさんが首相のところで、後に首相になった労働党のブレアさんとの討論でした。本会議場の上から見えていましたけどおもしろいです。野党時代のブレアさんがメージャー首相にガンガンやるわけです。毎週必ずやるんです。日本でも党首討論を大いにやるべきだと思った。

——菅さんは討論が上手ですね。

菅 国会というのは基本的に討論の場ですからね。私は討論を大いに生かしていくべきだ

と思う。橋本龍太郎さんなんか比較的切り返しがうまくいった。中曽根康弘さんもそうです。小淵恵三さんは丁々発止はあまりうまくなかったですね。

——鳩山代表は党首討論に臨むにあたって、いろいろ準備をしたり議論や工夫をしたのですか。

菅 私はいつさいかわりませんでした。現在の代表である小沢さんにも一言も言ったことはない。党首討論というのは予算委員会のように「党としてこうやっていこう」というのとやや違って、党首が個人プレーも含めてやるという面があるんですね。

——菅さんは自分が代表のときはどのように準備されたんですか。

菅 予算委員会だつて何だつてスタッフには相談します。私は予算委員会と党首討論が頭の中でゴツチャになってる。たくさんやりましたからね。私がやった党首討論は相手ほとんど小泉首相だったけど、個人的にはおもしろかった。

——菅さんと小泉さんの対決では03年1月の予算委員会で菅さんが、小泉首相の8月15日の靖国神社参拝や国債発行額を30兆円以下に抑制するという公約について「1つも守っていない」と批判し、小泉さんに「この程度の約束を守らないことは大したことではない」と言わせたのはヒットでした。

菅 そうそう。「公約を守らないのは大したことじゃない」と言った。

——ああいうときは「しめた!」と思うんですか。

菅 その場で「やった!」と思ってもあまりウケないときと、その場では必ずしも「しめた!」と思わなくてもあとで大きな話題になるときがある。あのときは「ひどいこと言うじゃないか」と言いましたけど、考えてみればいかにも小泉さんが言いそうな言葉じゃないですか(笑)。結局、小泉さんはそのことをずっと引きずっていた。政権が終わるまで気にしていた。だから最後の年の8月15日に靖国神社を参拝したんでしょう。答弁した瞬間はそこまで大きな問題になるとは思っていなかったでしょう。小泉さんは、その瞬間、瞬間でいろんな言葉を返す人ですから。

——予算委員会や党首討論で次に何を聞くかということを用意していても、実際には首相の答弁を聞きながら対応するわけですか。

菅 もちろんそうです。次の質問を必ず聞こうと考えていると、首相の答弁がおかしくても中途半端なところで追及をやめちゃうことがある。例えば年金問題をやったあとはイラク問題で、そのあとに教育問題をやろうと思つてると、イラク問題が盛り上がつていても途中で「教育問題に行こう」みたいになるわけです。私はやりとりが丁々発止になつてけりがかないときは、あとのことはすつ飛ばしてでも徹底的にやる場合が多い。どうするかはその場の雰囲気ですね。

やりとりが行ったり来たりという状況になつたら、だいたいはその場で切つて次のテーマに移るようにしました。同じようなやりとりが2、3回、重なつたら、これ以上やっても仕方ないと思つて切る場合と、わざと10回ぐらい同じやりとりを繰り返す場合がある。例えば小泉首相は「イラクの非戦闘地域はどこか」と聞くと「イラクのどこが非戦闘地域かわかるわけがない」と答えた。このときは「そんなの答えになっていない。イラクの非戦闘地域はどこか」と10回ぐらい繰り返して聞いた。すると新聞記事に書いてもらえるわけです。同じ質問を2回くらい繰り返しただけでは書いてくれない。(笑)

——つまり、国会で質疑をやっているときはテレビや新聞のメディアをかなり意識しているということですね。

菅 党首討論とか予算委員会というのは、国民がどう受け止めるかですからね。もちろん中身も重要ですが、野党は自分たちの主張を基本的にメディアを通して国民に伝えるしかないですからね。国会審議や党首討論などの機会に勢よくやると「民主党は元気で頑張

(12) 03年1月23日、通常国会の衆院予算委員会初日、民主党の菅代表が「小泉首相は公約を1つも守っていない」と批判し、8月15日の靖国神社参拝や国債発行額を30兆円以下に抑えるという公約を指摘した。小泉首相は「この程度の約束を守らないことは大したことではない」「公約どおりにやらないと言われればそうかもしれないが、総理大臣としてもっと大きなことを考えなければならぬ」と反論した。その後、小泉首相は「不適切な発言だったと反省している。まだまだ修行が足りない」と述べた。

ってる」と受け止められるし、首相らになんとなくやり込められていると「民主党は元気がない」ということになってしまう。

——そうすると党首討論で自説を延々と語り首相をあまり追及しない小沢一郎代表のやり方は間違っているわけですか。

菅 小沢さん流というのはあまりディベート型じゃないですね。単独のインタビュに答えるときは非常に説得力がある。本会議での質問もなかなかよかった。ただ小沢さんは丁々発止のやりとりがあまり好きじゃないんでしょうね。じっくり話を聞いてもらうのが得意なんですね。

——政府委員制度の廃止は、政治主導を実現するうえで1つの手段かもしれませんが、答弁が閣僚中心になった結果、質疑の質が下がったり答弁がいい加減になったように思います。

菅 政府委員制度廃止による内閣の側の変化が私にはまだ見えません。私が厚相をやったときの経験から言うと、官僚は事前に野党議員から質問を聞いて大臣の答弁をつくる。その結果、国会答弁で大臣にしゃべらせる内容で実は大臣をコントロールしているんです。あまりうまくしゃべれない大臣ほどそうなってしまう。ある程度しゃべれる大臣でも、「ここまで大臣がしゃべってください。ここから先のこまかいことは局長が答弁します」

という。結局、政府委員制度は、官僚が大臣をコントロールするための一番いい手段でもあるのです。大臣にしてみれば事務次官以下、官僚の協力がなく国会答弁ができない。だから官僚のやっていることはよく言えば協力、悪く言えば一種のコントロールですよ。だから、大臣が方針を決めるんじゃないって、官僚が決めた方針どおりに大臣を動かす構図になっている。ですから政府委員がいらないということは大臣が自分の言葉でしゃべって役所をコントロールするチャンスでもあるんです。

ただ、大臣が言ったことを官僚は平気で否定します。委員会の場でさえ「今、大臣がこう言われましたが、それは実はこういう意味です」とか言って、実質的に否定してしまうことがあります。(笑い)

——しかし、現実には財政政策や経済政策、あるいは安全保障政策に関する質疑のクオリティーがすごく下がってきているように思います。小泉首相の答弁もひどすぎました。「戦闘地域と非戦闘地域の区別なんか、できるわけない」と答えて、それがまかり通ってしまう。どうも緻密な議論ができなくなってきたように思います。

菅 そういう面はあります。それは痛しかゆしなんです。

——また、政治主導の名の下に新たに副大臣や政務官というポストを設けたにもかかわらず、野党は大臣が出席しなければ委員会開催に応じないということも起きています。大臣

が公務で外国に出張しているときは副大臣や政務官の出席でもいいと思うのです。そういう機会が増えれば若い議員のトレーニングの機会にもなります。

菅 一般論はそのとおりなんですけど、副大臣や政務官では答弁内容があとで否定されちゃう可能性はある。なにせ官僚は大臣の答弁でも平気で否定するんですから、まして政務官とかが自分の思いつきで答えてしまえば、あとになって「あれは政務官が個人的意見として言ったんです」ということになる可能性がある。最近、質問主意書を活用する議員が増えています。これがいいのは回答が閣議決定という手続きを経ていることです。これだとあとで否定するのがなかなか大変ですからね。

——民主党が政権をとったときのことを考えれば、副大臣や政務官に答弁をきちんとやらしてもらおう仕組みにしておいたほうがいいのではありませんか。

菅 日本では副大臣や政務官が設けられる前は、それぞれの省には大臣と政務次官が1人か2人いるだけで、しかも互いにほとんど会話がなかったのです。そして、大臣が都合で出席できないセレモニーがあると政務次官が代わりに出席するというようなことをしていた。いくら政治主導で政策を決めようとしても、役所の中には官僚以外の人間は大臣の政務担当秘書官がいるぐらいで、相談する相手がいない。だからわれわれが考えたのは、政治家のポストを各省5人ぐらいに増やし、それぞれにスタッフをつけ、全体で100人を超える政治家とそのスタッフが内閣に乗り込む、そういうのが民主党のイメージで、これはイギリス型なんです。だれが国会答弁をするかということも重要でしょうが、もともと政務官は行政をコントロールするためのポストというイメージなんです。国会答弁用の政務官ということはあまり考えていなかった。

民主党の躍進

——さて、2000年春に大きな政変が起きました。4月1日に小渕首相と自由党党首の小沢一郎さんが会談し、「自自公連立」が崩壊しました。直後に小渕さんが倒れて森喜朗政権が誕生します。直後の6月の総選挙で自民、公明、保守の与党が激減して民主党が躍進しました。自民党は40議席近く減らし、民主党は32議席増やしました。

菅 小渕政権はなかなか人気の出なかった政権でした。私も予算委員会で何度か小渕首相とやったんですが、記憶に残っていることといえばNTTドコモ株の問題¹³です。2000年2月14日、衆院の予算委員会で小渕首相の支持者がドコモ株を持っていたが、小渕さん

(13) この日、菅氏は衆院予算委員会で、「秘書の持つ株の時価が20億円にもなるということは、国民からすれば疑問が残る」などと指摘し、小渕首相は「問題を報じた週刊誌を名誉毀損罪で」すでに刑事告訴している」と応じた。

の代理で持つてるんじゃないかと追及したんです。その方は亡くなったが、株は奥さんに移らないで別の秘書に移っていた。それで私はその奥さんに直接会って話を聞いて予算委員会まで追及したのです。

いろんなポケベルのメーカーが全国にできて、それをドコモが統合していく過程で、ドコモ株と交換するものだから何億円というお金が手に入るわけです。町長やっていた小渕さんのお兄さんも何億円かを手にした。その株の名義を秘書にしていたら、その秘書が亡くなって、それが奥さんの知らないあいだに小渕さんの別の秘書の名義に書き換えられていたという問題です。私は奥さんと直接会って話を聞いて、予算委員会で質問した。

冒頭に「私は週刊誌だけの情報じゃなくて、自分の情報でやります」と言って追及した。途中で小渕さんが激昂するわけです。「なんだ！ そんなこと言っちゃって週刊誌ネタばかりじゃないか！」とか言って。「いや、私は亡くなった秘書の奥さんからこういう話を聞いた。もしなんだったらお聞かせしましょうか」と言って、ポケットからテープレコーダーを出した。それで小渕さんは「ううっ」となって、口の悪い連中から「あれが心臓にだいぶ影響したんだ」と言われました。

森政権の最大の問題はその決定プロセスだ。いわゆる「5人組」による密室談合がいちばん大きい問題です。また、病室で官房長官の青木幹雄さんが小渕さんと最後の会話をし

て意思を確認したとか。

——それで青木さんが首相臨時代理になったんです。

菅 青木さんは自分で閣議を招集して自分が代理になるわけです。青木さんは病室で「小渕首相から首相臨時代理を指名された」と言っていました。本当に言ったという医者者の証言はない。それどころか本当に小渕さんがものを言える状態だったかが怪しいんです。

実際、ものを言える状態ではなかったのではないかと疑われた。それで民主党は私も含めて何人かが、森さんが首相になる経過について徹底的に攻めた。このため森政権の正当性が最後まで疑われたわけです。

——菅さんはいろんな首相と予算委員会やり合っているでしょう。

菅 ええ、予算委員会に初めて出してもらったのは中曽根内閣のときです。私は中曽根さんのようなタイプのほうがやりやすい。中曽根さんについて覚えているのは戦略防衛構想(SDI)¹⁵に関するやりとりです。大陸間弾道ミサイルを打ち落とすための核爆発のエネ

(14) 内閣総理大臣に事故があるとき、あるいは欠けたとき、臨時に職務を行う閣僚のこと。内閣法9条で「予め指定する国務大臣が、臨時に、内閣総理大臣の職務を行う」と規定している。00年に小渕首相が倒れた際、事前に臨時代理が指定されていなかったことが問題になったため、その後は組閣や改造のときに臨時代理の職務を行う閣僚を5人ほど指名しており、1位には官房長官をあてている。

ルギーを使ったX線レーザー兵器をアメリカが開発していた。それで、86年11月5日の衆院予算委員会で私は「この兵器は核爆発を利用してはいるが、これは核兵器かどうか」と聞いた。このシステムは核爆発のエネルギーをX線レーザーの発生に使うが、核爆発そのものでミサイルを落とすわけじゃあない。中曽根さんは防衛庁長官や科学技術庁長官をやっていただけあって、核兵器の定義に詳しくかった。原子力潜水艦など推進力に原子炉を使っているからといって核兵器とは言えないことを知っていた。そのうえで「核兵器とは核爆発を直接、殺傷や破壊に使うものだ。SDIで1つのエネルギー源として核爆発を使う可能性は無きにしても非ずだが、この場合は間接的な利用だ」と答弁した。私は「原子力船は核爆発じゃなくて原子炉で核を制御して熱を出して石油の代わりに使っているだけだから核兵器と言えないのはわかるが、核爆発させてそのエネルギーで発生させたレーザーで撃ち落とす。これが核兵器かどうかと聞いているのだ」と言った。倉成正外相や外務省の局長は「研究段階であり、核兵器かどうかは判断できない」などとはっきりしたことを言わないんだ。翌日の新聞を見たら、正反対の報道ぶりだった。朝日新聞は「間接利用なら核兵器とみない」という見出しだったが、別の新聞は「核兵器と認める」となっていた。(笑い)

——中曽根さんがやりやすいというのはどういう意味ですか。

菅 私にとつて中曽根さんとか橋本龍太郎さんは同じ土俵で議論できるから噛み合うんです。噛み合うということは予測もできるから、たぶん中曽根さんはこういうことに対してある程度答えるだろう、最後こうやったら行き詰まるだろうというのが見通せる。

——小泉さんは全然違った。まったく答えがないんですからね(笑い)。こつちが言ったことと別のことを言う。それを平気でやるわけです。小淵さんや森さんは、場合によってはヨタヨタしますから、何となくいじめているような気分になった。(笑い)

菅 竹下登さんはどうだったですか。

菅 竹下さんは違いますね。懐が深かった。竹下さんに初めて質問したときは土地問題を取り上げ、農地委員会のことを聞いた。戦後、農地改革のときに全国に農地委員会¹⁶という

(15) (Strategic Defense Initiative) アメリカの戦略防衛構想。83年にレーガン大統領が発表した。ソ連からの核ミサイルを宇宙ステーションやレーザー光線を使って大気圏外で迎撃する構想。93年に中止された。

(16) 農村における封建的社会制度を改める目的で連合国軍総司令部(GHQ)が47年に打ち出した改革。不在地主が所有する農地などを地主から強制的に安い価格で買い上げて、それまで地主から借りて耕作していた小作人に安く売り渡した。この結果、数百年にわたって続いていた小作制度は完全に崩壊し自作農家は280万戸から540万戸に増加した。

(17) 農地改革の実施を実質的に担ったのが市町村の農地委員会。小作側代表5人、地主側代表2人、自作側代表3人の10人で構成された。いずれも選挙で選ばれた。第1回選挙は46年末に実施された。市町村の委員会は解放される農地を調査し買取計画をつくり、売り渡し計画に基づいて農地改革の実務を担当した。

のができたが、それは公選制だった。この農地委員会が各地の土地をどうするか決めていく。その話をずっとしたら竹下さんが「菅さんと私は何歳違つて」とか、得意の調子でやるわけです（笑い）。「実は私も戦争から帰つてきたときに農地委員になつたんだ」とか言うんです。

それから1週間ぐらいあとに、廊下だったかトイレだったかで会つたら、向こうから話しかけてきて「菅さん、このあいだ予算委員会で当時のG H Qのだれかが書いた農地委員会の本のことを言っていたけど、あの本、読んでみたよ」って言うんです。これが竹下流のやり方なんです。こっちはまだ若いでしょう。予算委員会でのやりとりはやりとりとして、しばらくして偶然会つと、「菅さん、あのときの本、読んでみたよ」って言うわけでしょう。総理が関心を持ってくれているんだと思つてうれしくなるわけですよ。

——橋本首相は政策に詳しい勉強家ですね。

菅 私から言うことややすいというか、議論が大体見える人でした。しかし、ちよつとでも質問者に弱点があると厭味な答弁をするんです。うっかり間違つて質問すると「今、先生がおっしゃったことは、もしかしたらこういうことじゃありませんか？ もしそうでとすれば……」という具合に厭味たつぷりに言うわけです（笑い）。そうすると質問者はボロボロになって、「ま、時間がありませんから」とか言つて次に行つちゃう。（笑い）

覚えている中で最も意味があつた質問は私が厚生大臣を辞めてしばらくしてからの96年12月6日の衆院予算委員会での質問です。「『行政権は、内閣に属する』としていた憲法65条のいう『行政権』のなかに、憲法第94条の地方自治体の行政執行権は含まれているのか、いないのか」という質問をしたのです。地方分権を議論するときに、地方自治も含めたすべての行政権をいったんは国の内閣が持つていて、国の持つ行政権の一部を地方自治体に渡しているという理解が一般にされているので聞いたわけです。それに対して橋本さんではなく大森政輔¹⁹法制局長官が「地方自治体の行政執行権は憲法上保障されている。したがつて、行政権は原則として内閣に属するが、逆に言うと地方公共団体に属する地方行政執行権を除いた意味における行政の主体は内閣であるということになる」と答えた。

国と地方公共団体の関係は、上下なのか対等な関係なのかということをはじめば議論されてきたのですが、このときの答弁は、上下関係ではないということをはっきり言つたわけです。つまり、地方公共団体は霞が関の支店のようなものではないという意味で、画期

(18) 憲法65条は「行政権は、内閣に属する」とし、94条は「地方公共団体は、その財産を管理し、事務を処理し、及び行政を執行する権能を有し、法律の範囲内で条例を制定することができる」としている。ここでいう内閣に属する行政と、地方公共団体が執行する行政との関係がしばしば議論になっている。

(19) 京大卒。大阪地裁判事、法務省民事局参事、内閣法制局第一部長、同次長などを経て、96年から99年まで内閣法制局長官。その後、警察刷新会議委員、国家公安委員などを務めた。

的な答弁だったので。

10年後に大森さんに裏話を聞いたんです。大森さんは「あの答弁を書いたのは山田君だ」と言うんです。「山田君ってだれですか」と聞くと「今の京都府知事ですよ」と言った。山田啓二²⁰さんのことで、当時、自治省から法制局に向向していたんですね。この答弁を引き出したことは、松下圭一さんなんかには大変高い評価をいただいたんですが、翌日の新聞には「一行も載らなかった（笑い）。この答弁は地方分権の本質的な議論なんです。さすがに橋本さんも、そのレベルの議論は法制局にまかせていたようですね。」

「加藤の乱」

——それでは、2000年秋の「加藤の乱」に移ります。11月9日夜、ホテルオークラで開かれた読売新聞会長の渡辺恒雄さんたちの会合「山里会」に出席した加藤紘一さんが「内閣改造で入閣するのか」と聞かれて、「森さんは内閣改造できるんですか」と発言して、野党が提出する動きを見せていた内閣不信任案に賛成する考えを明らかにした。その席で、加藤さんは渡辺さんに「鳩山さんはポピュリストだが、菅さんは違う。菅さんはあなたより右だ。私は菅さんに5秒で連絡がとれる」と言って、携帯電話を取り出して菅さんの短縮番号を登録していることを見せたそうです。

そして3日後の11月12日、菅さんと鳩山さんが協議して、加藤さんが離党したら首相候補として推すことを選択肢の1つとすることで、加藤さんとの連携を目指すことを確認するとともに、鳩山代表は情報を集めるように党内に指示をしたという記事が出ています。14日には菅さんが「加藤さんとは多少懇意だ。思い切って民主党の若い仲間と政権をつくる気はないか」と発言しています。菅さんや鳩山さんは、加藤さんとういう手段でどういうコミュニケーションをしていたんですか。

菅 2000年9月の人事で私は幹事長に、政調会長が岡田克也さん、国対委員長が川端達夫さんになりました。新民主党ができたときに最初は私が代表で、羽田さんが幹事長だった。そして代表が鳩山さんに代わったのですが、その時点でも羽田さんは幹事長だった。それがこの人事で羽田さんには「特別代表」になっていただいた。

加藤さんとは自社さ政権のときに政調会長同士だったので信頼関係ができた。すでに話したように村山内閣を支えたのは自社さ3党の3人の政調会長でしたからね。ときどき食事をしたたりお酒を飲んだりしていました。

(20) (1954) 東大卒。自治省に入り行政局行政課長補佐、内閣法制局参事官、京都府総務部長、副知事などを経て、02年に京都府知事に当選。

一般的に政局になると代表や幹事長が中心になって対応する。ただ、私の記憶で言うと、「加藤の乱」の前に加藤さんからは特別な相談はなかった。加藤さんが動き出してからはいろいろコンタクトがありました。もちろんこちらから仕掛けて起きた乱ではない。当時、衆院は野党全体で190議席で、そのうち民主党は129議席でしかなかった。それに自民党に対してそんなことを仕掛けられるほどの手練手管はまだ持ってなかった。この事件は、あるときから加藤さんが森政権に対して非常に危機感を強めて、森おろしに動いたということでしょう。森政権では自民党がダメになるというよりも、日本がだめになるという思いが強くなっていったようですね。

私も「山里会」には2度ほど呼ばれたことがあります。当時、私の携帯に加藤さんの短縮番号が入っていたかどうか覚えてませんが、連絡をとれる関係にあったことは事実です。「山里会」での加藤さんの発言を新聞記事で見ても、鳩山さんと話し合っ、こちらとしては不信任案を出すのが加藤さんらが賛成してくれるかどうか、さらには党を割れるのかどうかはわからない。われわれだけで政権をとれるわけじゃないから、加藤さんらが自民党を割って出てくるときには、その人たちとわれわれが連立して加藤首班でもいいから政権をつくれればいいじゃないか。われわれは自社さ連立政権などの経験をしている。そういう認識で対応しようということになった。細かいことは忘れましたが、加藤さんとは何

度かは直接会って、意思を確認した。

ただ、その途中で加藤さんたちと「どこかで一緒に旗揚げしよう」なんてことを話し合っていたわけじゃない。われわれには自民党に手突っ込む手立てもないですからね。もしも森政権が潰れた場合、次の政権をどうするかということについても、あのときどこまで話を詰めたか忘れましたが、「いろんな選択肢があるんじゃないですか」というような、ある種の含みを持たせた言い方をしました。

ただ、加藤さんたちが不信任案に賛成し、さらに自民党を出てくれないと、そんなことは実現しない。われわれが自民党と連立するようなことは考えていませんでしたから。もしも加藤さんや山崎拓さんたちが自民党を飛び出してわれわれと一緒にやろうということになれば、場合によれば加藤首班でもいいかなと私は思っていました。ですから、こちらが自民党に手突っ込んだんじゃないくて、加藤さんのほうがだんだん決意を固めていき、その過程で私のほうに「どうだ」という話があったわけですね。

——加藤さんと具体的にはどんな話をしたのですか。

菅 私のほうは「民主党内および野党全体の状況を見れば、衆議院で共産党や社民党を含めて190は不信任案に賛成する。これは私のほうで責任を持ちます。いくらなんでも不信任案に反対するはずがないでしょう」と言いました。加藤さんは「自分のほうはこれく

「らしい数があるから」と、可決にあまりあるぐらいの数を言うので、本当に大丈夫かなと思いましたが、加藤さんは「大丈夫だ」と言われていました。そういう展開の中で加藤さんがどんなエスカレートしていくのを、われわれはそうなってくれるならいいなという期待感を持ちつつも受け身で見えていたのです。

——当初、加藤さんは何人ぐらいを集めることができると見ていたんですか。

菅 加藤派は45ぐらい、それに山崎派が19でした。その他の無所属議員などを入れて80議席が見込んでいましたから、野党と合わせると全体で270くらいですよ。あのとき衆議院は全部で480でしょう。240が過半数ですから、加藤派と山崎派が丸ごと賛成だったら文句なく過半数になる。加藤さんは「いろいろあるから、一部の人は賛成できなければ棄権でもいいんだ」みたいな余裕をもった態度だった。大丈夫かなと思ったが、こちらからは手を出せない。変に動けば逆効果ですからね。私の責任は野党をまとめることだったが、いくらなんでも反対は出ないだろうと思っていました。

加藤さんがこちらに確かめたかったことは2つだったと思う。1つは190というのが本当に大丈夫かということ。もう1つは、本当に不信任案を可決したときにその後の政権についてもちゃんと考えているのかということです。

——加藤さんは、自分を首班にすることを条件にしたりはしてないんですか。

菅 私の記憶では、加藤さんのほうからああしろこうしろと言われたことは一切なかった。われわれの立場からすれば、過去の連立をみてもある程度のリスクをとったところがリーダーシップをとっている。われわれが190を固め切ってもそれ以上増えることはない。加藤さんが条件を出すと言っても、われわれが不信任案を出して賛成するならば、条件はいらないじゃないですか。もしあるとすればそのあとのことですけど、われわれ自身がそういう考えでしたから、条件とか何とかいうことはまったくなかった。

——十分な数にならない可能性があったわけですか。

菅 いや、足りなかったかもしれないです。不信任案が通ってしまえば新政権ができる前に総選挙があるでしょう。そのときに加藤グループが小選挙区との関係でどういう形で行動するか。あるいは森さんが総辞職したあと、自民党がウルトラCで加藤さんを総裁にしてくることもありうる。向こうはいろんな可能性があるわけです。だからこちらはあんまり振り回されないようにしようと思っていました。われわれは当然不信任案を出して賛成する。その中で向こうがこうしてくれるならここまで考えるところというスタンスですから、「加藤の乱」が途中で終わったのは残念でしたけど、こちらの工作が失敗したということではない。

——この話は情報管理が重要だったでしょう。党内でこの問題を共有していた人は限られ

ていたんですか。

菅 加藤さんの動きが公然たるものになっていましたから、そのときにどうするかというような微妙な話ともかく、加藤さんとの連携が「絶対にいかん」という人が大勢いるという状況ではなかった。

——情報管理にあまり神経を使わなかったのですか。

菅 われわれからするとスタンスはシンプルだった。わが党を含めて野党で不信任案を出して賛成するというのはほとんど全員一致した認識だった。そして加藤さんの動きは表に出ていた。あとはそのあいだに何らかの水面下のコンタクトがあるかないかということだが、それを私から言うことは一切ない。私のほうからこうだああだということはない。ただ、加藤さんとの信頼関係が崩れたら向こうの基本戦略が変わるかもしれないから、信頼関係だけは保つように連絡を取り合いました。

——自党内で多数派工作が進み、加藤派の議員は選挙区事情などいろいろなものをからめられてどんどん切り崩されていきました。そういう過程は、民主党としてはどうしようもないですよ。

菅 そうですね。今でも印象的なのは国会のトイレで古賀誠さんと一緒になって、私が「よろしく」みたいなことを軽く言ったら、「私はなんにも聞いてないんだよねえ」って。

あのとき古賀さんは国対委員長だったんですよ。加藤さんからすると、古賀さんを積極的に共同謀議に入れると苦しみだろうからということだとぶん話をしてないんですよ。古賀さんからするとなんにも話がない。その結果、野中さんと一緒に切り崩しの先兵になっていくわけですね。

——かつて1984年の自民党総裁選の際、再選を目指していた中曽根首相に対して、自民党の非主流派と野党が連携した「二階堂擁立劇²¹」という事件がありました。構図は似ている面がありますね。

菅 こちらから仕掛けたわけではないけど、まさに二階堂擁立劇と同じ構造ですね。自民党の二階堂グループと野党が組んで過半数をとる。加藤・山崎グループと野党のわれわれが組んで過半数をとる。しかし、われわれは積極的に応じたものの、それ以上に仕掛けるということはしなかった。中途半端にやったら逆効果ですからね。

——野中さんが猛然と加藤派を切り崩したわけですが、野中さんは菅さんと加藤さんが連

(21) 84年の自民党総裁選で、再選を目指していた中曽根康弘首相に対して、非主流派の鈴木善幸、福田赳夫、三木武夫元首相らが二階堂進副総裁の擁立を画策。さらに衆院本会議での首相指名をにらんで野党の公明党の竹入義勝委員長や民社党の佐々木良作委員長との連携も工作した。しかし、中曽根氏を推す田中角栄元首相の巻き返しもあって、この工作は最終的に失敗し、中曽根氏が再選された。

絡を取り合っていることをつかんでいたんですか。

菅 一般的にはそんなに秘密じゃないです。だって、9日に加藤さんが言ったことが記事になるわけでしょう。そこが加藤さんのやり方が甘いといえば甘いでしょうが、森政権に対するものすごい危機感の中で、もしかしたらそういうことを表に出すことで森さんが降りるとでも思っていたかもしれない。

——11月20日の衆院本会議が不信任案採決の日でしたが、いろいろあって21日未明にまで持ち込まれました。直前に、菅さんは加藤さんに電話をして、「まだ不信任案採決までに時間があるから頑張れ」とか、「とにかくこっちに來たらどうか」と話したと報じられています。これはもう離党しろということですか。

菅 そういう意味じゃないですよ。一連の動きを見てちょっとヤバいなという感じを持っていた。宮澤さんまでが加藤さんに否定的な発言をしていましたしね。それに対して山崎さんは派閥をしっかりと固めていた。ところが加藤さんのほうは古賀さんを含めて崩れていくわけです。たしか古賀さんが宮澤さんに会いに行つて、宮澤さんが否定的なことを言つて、そのあたりから切り崩しが本格化していった。

採決の当日になって客観的に見て危ないなと思つて加藤さんに連絡したのです。私が言ったのは、1人でも2人でも、2人というのは山崎さんと2人という意味ですが、1人で

も2人でも国会へ来てちゃんと不信任案に賛成したらどうですか、ということですよ。1人でも2人でも賛成して、それからどういふ政治行動をとるか、離党になるか除名されるかわからないけど、そのときにはどういふエネルギーが加藤さんに集まるかわからないわけです。加藤新党論だつて出てきたかもしれない。加藤さんが国民的にもものすごいリーダーになつてきたら、加藤さんを党首とした新党にわれわれも参加しようということになるかもしれないじゃないですか。どうなるかわからない。とにかくあそこまで行つたんだから、最後までやったらどうですかと考えた。それで電話で「国会に來てくださいよ。不信任案に賛成しましょうよ。そのあとのことはそれからじゃないですか」と言つたわけです。

——すると加藤さんは何と言いましたか。

菅 「ちょっと相談する」とか言つたが、結局、來なかつた。いっぺん出かけたという話も聞きましたけどね。來たからと言つて、不信任案が可決されるような状況でなくなったことは事実だけど、加藤絃一という政治家がああとき本会議場に来ていたら、その後どういふ展開になつていたかと思えますね。

——大きな変化が起きていたでしょうか。

菅 ああときはインターネット政局だった。加藤さんが自民党内の古い勢力に負けたとな

ると、それに対する国民の不満のマグマがたまる。特にインターネット勢力の間で。あの日は何百万人という人が早めに帰って国会中継を見たそう。飲み屋が空になったと言われたんですよ。

加藤さんが悲劇のヒーローになるなら徹底的になればよかったと、私は今でも思っているんです。予想ができないけど、何かが起きています。「ギリギリまで来ちゃったんだから、やっちゃまえ！」と私なんか思うわけですよ。森さんのあとは放つといたって加藤さんになる可能性が高かったんだから、われわれにとつていいか悪いかは別として、加藤さんは自民党の中にふつうにいれば、森さんのあとに加藤さんが首相になる確率は6割ぐらいあったんじゃないかな。あえてそうしなかったんだから、ここまで来たら「やっちゃまえ！」と思うわけですよ。

ところが、森さんがあまりにもひどいと思って加藤さんは動いたわけでしょう。行動を起こした判断は結果としては甘かったけど、起こした以上はやりきらなきゃだめだ。どうなるかなと思ったら、谷垣禎一さんが「あんた、大将なんだから、行っちゃいけない」と言うわけでしょう。もしあそこで何か動いていれば、インターネットの世論という意味で、日本の政治がガラッと変わったかもしれない。インターネットの世論に彼は押されてというか、それを過大に評価して動いて、しかしそこまで行ききったときは本当のパワーにな

った可能性もあるわけですよ。

——しかし、加藤さんは動かなかった。加藤さんという政治家がよくわかったでしょう。

菅 よくわかったというか、加藤さんの最後のそういうところの弱さが、客観的にはわかりますよね。優等生なんです。